
おまえなんかだいきらいだ!

mirai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おまえなんかだいきらいだ！

【著者名】

N1335BA

【作者名】

mirai

【あらすじ】

何故俺の家に俺の大嫌いな生徒会長だいるんだ！？

プロローグ

ピンポン

寒い冬、12月。

こたつに潜りこみながら、お気に入りのアクションゲームをしていた俺、

鴻上 京は、チャイムの音に小さく舌打ちをした。

どうせ代わりに出てくれる奴なんていないし

俺に家族はない。両親は幼いころ交通事故で亡くした。

中学卒業までは、親戚の家で預かってもらっていたが

高校入学をいい機会に独り立ちをしたのだ。

両親も俺に財産を残してくれたし、金に困ることはなかった。

いろいろ慣れないことがあったが、俺と同じように独り暮らしをする

友人にも助けてもらって、何かと充実している。

もうこの暮らしを始めて3年だった。

そんな俺の唯一の苦手なヤツ。

それは、俺の通っている高校の生徒会長…。

名前を保科 翔。成績優秀、容姿端麗、運動神経抜群。

なんでも揃っている、いわば”完璧”といつやつだ。

こんなやつだから、女子人気も相当に高い。

別にそれが気に入らないわけではない。

何故かわからないが、何かと俺につっかかってくるのだ

めんべくせーな…

億劫に思いながら、こたつを半ば這いずるようにして出て、

眠い目をこすりながら、ドアを開けた。

するとそこには眠氣を吹き飛ばすようなものがあった。

といつより居た、といふほうが正確か。

何故…

何故俺の家に俺の大嫌いな生徒会長がいるんだ…つ…?

なんでおまえがいるんだ！？

何故だ……

俺がただ愕然として突つ立つていると

ふいに声をかけられた。

「急に邪魔して悪かった」

その声で現実に引き戻された俺は、声が裏返っていた。

「なんでお前がここにいるんだっ……！」

保科を睨みつけながら言つた。

「……いや悪いのか」

「うう……」

言葉に詰まる。確かにこいつがここにきて何か悪いところとはない。

ただ、こいつが何故ここにいるのかただその疑念が渦となつて頭の中を駆け巡つた。

「何故俺がここにいるのか…理由を知りたいんだろう？」

保科の黒縁メガネの奥の眸が光つた。

「…なんなんだよ」

少しふてくわれながら尋ねた。

「お前に…告白して来た」

は…？

ここ、何を言つているんだ。一瞬幻聴かと思つた。

そして、夢か現か確かめるため自分のぼほを強くつねつた。

痛い。ちょっと強すぎた。

…夢じゃねーの、か

ではこいつたいがりこいつなんだりつか。

まじよ…告白とこつても”愛”の告白かどつかなんてわからない
じゃないか。

そつだ。そんなのまだわからない。確かめればいい。

「告白…うへえいこいつは…？」

恐る恐る尋ねる。

「お前…バカなんだな」

驚愕の次に怒りの感情がふつふつと湧き上がる。

「バカなんだな…つて普通言いつか！？そりゃお前より断然に頭は悪いかもしねーけど？」

今言つことないだろ！！！？」

怒りを露わにし、半ば怒鳴るように言つた。

「今…改めて実感した」

「この男は…っ…………！」

俺が次の罵声を浴びせかけよつとしたとき、

「本題にもどつていいか」

と保科の落ち着いた声が聞こえた。

まだ怒りは収まつていなかつたが、話だけでも聞くことにした。

「…10分」

それが話ができる猶予期間だ。

「わかつた。手短に話す…」

「ここで保科は大きく息を吸つた。

「…お前のことが好きだ」

急な告白

「つや……だろ？」

そんな訳ない。保科は俺に突っかかってきて
俺のこと嫌いなはず……？なのに何で……？

頭の中が混乱していた。そのまま俺はへなへなと座り込んでしまつた。

「そんなにショックだったか」

保科の声が少し落ち込んでるよつこも聞こえた。

「ショックつづーか……なんづーか……」

髪をくしゃくしゃにしながら隠昧な返事を返した。

すると、保科がしゃがみ俺に田線を合わせてきた。

不覚にも、保科の整った顔立ちとキッとしてしまつ。

「つや——」

「お前は……俺のことびりついの悪い……？」

急に返答を求められてもなんと言ひていいかわからなかつた。

「んなこと言われて…。」

つい田線を逸らしてしまった。

「…わかった」

その言葉と同時に、保科は立ち上がり玄関の方へ体を向けた。

「いつでもいい。返事待ってるから。急に邪魔して悪かった。じやあな」

そう言い残して足早に出て行ってしまった。

「一体…なんだつたんだ…。」

揺れ動く気持ち

あの嵐のような出来事の後、俺はずっと考えていた。

俺は保科のことを探りついでいるのか…

答えはすぐに出た。“嫌い”という感情だった。

もしかすると、嫌いなのではなく、苦手なだけかもしれない。

しかし、よい感情を持つていよいのは確かだった。

確かに入学当初は、男子でもギシとするほどかっこいい保科に好感はもっていた。

そもそも、なぜ急に今なんだろう?

思ひ立つたように俺の家に来るなんて。

保科は頭こじらうが、どこか抜けているところもある。

夜11時近くに他人の家にやつてきて吐血するだなんて…。

少しおかしい。いつも返して、笑いが込み上げてきた。

「ふつ…保科ってやつぱおもしれーなー…」

その時、はつとした。あれからずっと保科のことを考へてる。

嫌いなヤツならすぐつれはよかつた。なのにあの時俺はそつ答へをださなかつた。

「俺は

あいつのことが好きなのか……つ／＼

何で……わからない。急に心臓がドキドキし始めた。

保科は、俺にいろいろかいを出してくる。

だけビ……心底嫌悪感を催すようなものはなかつた。

うづこぐらこにしか思つたことはない……それにあいつは俺の世話も焼いてくれた。

ノートを忘れたとき何も言わずに『』しててくれたのは、誰だつたか?

授業で指名されたとき隣でこいつそり耳打ちしてくれたのは……?

担任に教科書運びを手伝わされた時、何気なく一緒にやつてくれていたのは……?

全部、全部……保科だつた……つ。

急に保科への感謝の気持ちが込み上がつてきた。

確かに嫌味はいうかもしない。だけどそれ以上に保科は俺のため
に近くしてくれた。

保科の存在をこんなにも近くに感じた。

「保科……っ」

そのまま俺はドアを引っ掴み、夜の街へと飛び出していた。

あいつの家

「ハアっ…ハアっ…確か…この辺だつたよなつ…」

息も絶え絶え、わずかな記憶を頼りに保科の家を探した。

寒い12月の夜道を走ってきたせいか、手の感覚がない。

「さみいっ…

コートのみの防寒具はこの気温ではキツかった。

まだ保科の家も見つかっていない。

今日はもう帰る…。そう思っていたとき、

道の向こう側から見慣れた人影がやってきた。

保科だつた。どうやらコンビニに行つていたらしい。

保科も俺と同じ独り暮らしだから、夜食でも買いに行つたのだろうか。

向こうも俺に気付いたらしい。小走りに近づいてきた。

「…えらい…？」

保科は開口一番にそう尋ねてきた。

「返事を…つ返しに来た…つ

まだ息が上がっている俺は、切れ切れに言つた。

「えつ…？」

「俺…つ」

そこで俺はとんでもない行動に出た。

自分でも信じられなかつた。こんな大胆なことをするだなんて。

俺よりも少し背の高い保科の脣に、自分の脣を重ねて

「んつ…俺、お前のこと好きだつ／＼／＼

「つ／＼／＼／＼／＼

保科はそのまま少し呆然としていた。

無言の空氣に耐え切れなくなり、俺は

「さみいな…何かお茶でもだしてくんねーかな…／＼／＼

少し照れながら言つた。

すると、その一言で意識が戻つたのか、保科が

「…つああ、そうだな。行こうか

と半ばうつむかいで窓で眺め、そのまま保科の家へ向かった。

「・・・あ、入つて」

保科は、まだ先ほどの出来事が信じられなかつたのか、

俺を自宅へ招き入れてくれた。

「急に来て悪かつたな・・・」

「…………いや大丈夫だ…………」

また返答が遅れた。

それが面白くて、俺はまた苦笑してしまった。

「ふつ」

「なつ
・
・
・
何
が
可
笑
し
い
・
・
・
?

「いやー、お前おもしれーなと思つてさ・・・俺にキスされてから

上の空だせ?」

そう言つと保科は真つ赤になつた。

二〇一〇

それから、保科に告白すると決めてからから黙つてこたじを口にした。

「あ、あのセ・・・俺たちって付合いつののか・・・な／＼」

「えつ／＼」

「あ、こやつは気になつただけなんだけど・・・お前は・・・？」

「・・・俺はお前をえよければ・・・ヒー／＼」

少しほ予想していくが、本当に保科と付き合つなんて

昨日までは考えつかなかつただろう。

「や、そつなの・・・か／＼じやあ・・・これからよひへ／＼

「つ／＼あ、ああ。よろしく・・・」

それから俺たちの新しい関係がスタートした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1335ba/>

おまえなんかだいきらいだ!

2012年1月8日20時45分発行